

# 幼児期の否定的感情制御と 否定的感情に関する非言語・言語回答、 保育士による問題行動調査の関連

鹿 島 な つ め

A Cross-Sectional Study on Negative Emotion Regulation, Awareness  
and Verbalization of Negative Emotion and Nursery School Teachers'  
Ratings of Problem Behaviors in Early Childhood

Natsume Kashima

## 問題と目的

幼児期後期は二者関係から三者関係的な世界に幼児の人間関係が展開していく時期である。幼児は周囲との人間関係や毎日の生活経験を通して社会性、感情・行動等の自己制御を発達させていく。自律的な感情制御の萌芽を2歳児の感情制御行動観察より導く研究（金丸・無藤, 2004；坂上, 1999）からも、幼児期後期が感情制御をより自律的に行う段階であるという見解は一致している。

感情の中でも不安や悲しみ、怒りといった否定的感情が生じる場面は乳幼児期の子どもにとって当然葛藤があるものである。しかし、他律的に周囲の愛着関係がある人物達と共に葛藤の解決を行っていた段階から、幼児期後期には否定的感情が生じる場面に対して自律的に葛藤の解決を図る試みが必要となってくる。

幼児期の感情への接近については、従来自らの否定的感情と距離をとる傾向（Glasberg & Aboud, 1982；久保, 2000）や肯定的感情の報告頻度が否定的な感情喚起を意図した場面でも高いこと（Durbin, 2010）が報告されており、自ら

に否定的感情を近接して語ることへのバイアスの存在が報告されてきた。つまり幼児期は、このバイアスがある状態から否定的感情への接近と制御を自律して行う状態への重要な移行期であると考えられる。鹿島（2000）は、主人公が不安喚起場面に遭遇している図版を用いて3-6歳の幼児の不安感情への言及の発達の変化を検討し、特に対人場面において、各年齢間で不安感情への言及に有意な差が見られたことを見出している。この研究では、5-6歳時点で全般的に幼児は不安を含めた否定的感情に言及が可能であり、不安喚起場面への感情制御について語るができると考えられた。

しかし自律的な感情制御に向けた移行期である幼児期後期は、社会的場面における個人差が徐々に顕れる時期でもある。安部・今村・楠（2002）はランダムに選定した全国保育園への質問紙調査の結果から、否定的感情の比較的強い喚起である“キレる”状態は年長児（5-6歳児）に最も多く存在したと報告している。ここから幼児期の感情制御発達不全により、臨床的問題を呈する一群の子どもが、幼児期後半には出現していることが理解できよう。この連続線上の問題として、近年文部科学省の問題行動調査によって小学校内外での暴力件数の急増が報告され（e.g. 文部科学省, 2013）、低年齢での暴力行為が増加の一途を辿っている（文部科学省, 2020）。この暴力行為増加の要因については児童生徒の育成・生活環境の変化、経験するストレスの増大に加えて、感情を抑えられず、考えや気持ちを言葉でうまく伝えたり人の話を聞いたりする能力が低下しているという世代から考えられる特徴と、同じ児童生徒が暴力行為を繰り返すという個人差から考えられる傾向が指摘されている（文部科学省, 2011）。

こうした否定的感情制御発達の不全と問題行動の関連については、暴力行為、攻撃的行動等の Externalizing（外向的）な問題行動との関連を中心にこれまで多く報告されてきた（e.g. Halligan et al, 2013；Mullin& Hinshaw, 2007）。加えて、近年、精神病理においても感情制御不全と様々な精神症状との関連が多く指摘されており（Aldao, Nolen-Hoeksema, & Schweizer, 2010）、どのように通常の発達が臨床的問題としての感情制御不全に至るのかについて検討が必要とされている。

子どもの自己制御発達に関する個人差は1, 2歳以後かなり安定しているこ

とがこれまでわかっている (Eisenberg, Spinrad, & Eggum, 2010)。どのように2歳時以降にこうした個人差が問題行動、症状化していくかについては、前頭前皮質の機能不全、ADHD等の発達障害特性といった器質的要因や、養育者の感受性、精神症状の有無といった環境的要因といった単一の要因から検討した研究もあるが、それらが累積的に相互作用することで問題行動化、症状化していくとするモデルも現れている (Dodge, Greenberg, Malone, & Conduct problems prevention research group, 2008)。

こうした感情制御発達に関する累積的な個人差がどのように幼児期後期に起こる問題行動と関連するかについて、鹿島 (2020) は3-4歳から5-6歳にかけての3時点の縦断研究を実施し、3-4歳の言語による否定的感情制御が幼児期後期の非行・攻撃的問題行動の発展を抑制することを報告した。3-4歳時に否定的感情が喚起される場面にいる主人公の対処について、言語で回答できる子ども (対処回答が自律的であるほど得点が高い) は5-6歳の非行・攻撃的問題行動が有意に低かった。

しかし、こうした否定的感情に関する言語による感情制御生成と幼児にとってバイアスのある否定的感情の覚知 (awareness) との関連はどうなっているのだろうか。

前述の近年の精神病理、心理療法の動向から、臨床群の研究においては、対象児について怒り、悲しみ、不安などの否定的感情の扱えなさが頻繁に特徴としてあげられる (e.g. Pollak et al, 2000 ; Terwogt, 1990)。Rieffeら (2007) は9歳から16歳を対象に感情の覚知性を6因子で構成された質問紙で測定し、そのうち Differentiating Emotions (感情の識別)、Verbal Sharing of Emotions (感情の言語共有) 因子が、Children's Depression Inventory (CDI) 得点と The Worry Questionnaire 得点との間で有意な負の相関を示したと報告している。つまり、生じている感情の識別がつきにくく、感情について他者との言語共有が少ない児童は抑うつ傾向、認知的不安としての Worry (心配) が高かったと考えられる。このように臨床的な症状と否定的感情の覚知性については関連が報告されているが、幼児期の感情制御においては否定的感情を覚知することと感情制御に関連が存在するのだろうか。

このため、本研究では非言語による否定的感情の覚知と否定的感情制御との関連を検討する。また、上述の覚知性とともにも否定的感情制御を幼児の否定的感情に関する言語回答から検討することを目的に加える。愛着と感情制御を媒介する言語の問題は従来より指摘されてきており、この時期言語発達により感情を言語で捉えることができることが、否定的感情制御回答の生成にどのように影響を及ぼしているかを検討する。

また臨床的問題発現との関連検討のため、保育園クラス担当保育士の回答による問題行動調査を行い、否定的感情の覚知・否定的感情制御との関連も検討する。

## 方法

本研究は7年間の縦断調査（調査の一部は鹿島《2013, 2020》で報告）の予備調査として行われた（縦断調査は、調査使用図版作成のために観察を行ったA保育園、本研究の調査を行ったB保育園とは異なる5園で行われた）。

予備調査の主な目的は、調査対象年齢の幼児に①調査使用図版と調査における質問の内容が理解可能であるかを確認すること、②否定的感情に関する質問への非言語回答と言語回答が否定的感情制御生成とどのように関連するか検討すること、③否定的感情に関する幼児の回答と保育士による問題行動調査（CBCL/2-3, TRF）の関連を検討することであった。なお、調査の実施にあたっては、被調査児が通園する保育園に調査の目的と方法を事前に説明し、実施の承諾を得ている。また調査内容については当時の著者の所属における倫理委員会の審査を経た。

### 被調査者

F県内のB保育園園児52名（年少児（3-4歳児）20名・年中児（4-5歳児）12名・年長児（5-6歳児）20名；男子24名・女子28名）と被調査児が所属する保育園クラス担当保育士。

### 否定的感情制御面接調査での使用図版の作成

F県内のA保育園において、4日間3-6歳児の園生活における否定的感情の表出を著者（調査者）と3名の幼児教育専攻の大学生で観察し、エピソードを

収集した。収集されたエピソードに基づき、否定的感情を幼児が感じると考えられる6場面（新奇場面、失敗場面、養育者との分離場面、他子どもの否定的言動、物の取り合い場面、怖い犬との出会い場面）の図版を作成した（図1）。新奇・怖い犬との出会い場面以外は、図版内に主人公の否定的感情の原因となる人物が登場する対人場面である。図版の主人公は新奇・失敗・物の取り合い場面が男児、養育者との分離・他児からの否定的言動・怖い犬場面では女児であり、表情が見えない後ろ向きに描かれた。

### 3-6 歳児対象の否定的感情制御 個別面接調査手続き

上記の手続きによって作成した図版を使用し、F県内のB保育園において3-6歳児に横断的調査として個別面接調査を行った。

面接調査の手順としては、①図版の主人公の表情選択（非言語設問）、②主人公の感情設問（言語設問）③主人公が図版で取り得る対処（感情制御）設問（言語設問）を、6場面について行った。

面接調査は、ノートパソコン画面上に否定的感情図版を提示し、各場面についての一定の教示の後、①図版の主人公について喜2・悲2・怒2・ニュートラルの7種の表情（図2：鹿島、2000）から指さしや言葉での選択（非言語設



図1：否定的感情図版

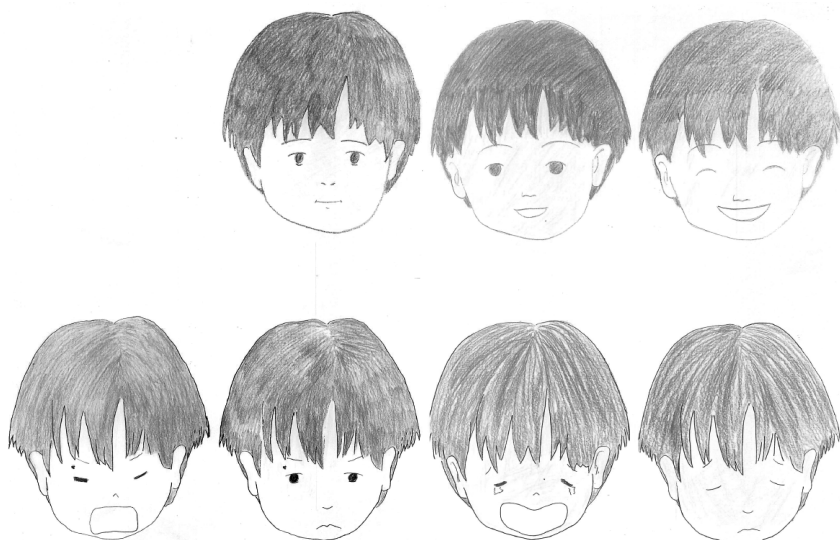


図 2：表情カード（図版の主人公が男子の場合）

問)、②図版の主人公に生じている感情についての質問(言語設問)③図版の主人公がその感情に取り得る感情制御についての質問(言語設問)を6場面について行った。6場面の提示は新奇(非対人場面)、失敗による叱責、養育者との分離、他児からの否定的言動、物の取り合い(対人場面)、怖い犬との出会い(非対人場面)の順で行い、調査時間は一人15分程度であった。

調査者は被調査児の全回答に肯定的に応答し、調査終了時には肯定的感情喚起を意図した図版(主人公が他児に遊びに誘われる場面)を用い、面接調査内容による影響に配慮した。調査者は調査開始1か月前から保育園を訪問し、遊びを通して被調査児と日常的に会話する関係にあり、個別面接実施の承諾可否についても毎回被調査児とやりとりの上、保育園事務室内の調査スペースで個別面接調査に入った。そのため、全被調査児の言語能力に問題はなかったと考えられる。

個別面接調査は、被調査児に記録の意図を説明し、調査スペース内に設置したビデオカメラにて録画された。録画の使用法(録画を使用する人物は調査

者のみであること、回答の記録のためのみに録画すること）は面接調査前に被調査児に説明し、了承を受けた。

#### 個別面接調査回答コーディング

①図版の後ろ向きの主人公についての表情選択（非言語設問）について、沈黙・回答なしを0点、喜・ニュートラルの表情選択を1点、悲・怒の表情選択を2点として得点化した。得点化は否定的感情の覚知を表現できるかという観点で分類した。幼児における悲しみと怒りの混同の知見（Stein & Levine, 1995）から悲しみと怒りの厳密な分類はせず、否定的感情の覚知とした。

②主人公に生じている感情の言語化について、沈黙・回答なしを0点、感情に関連のない言語回答を1点、“いやな気持ち”など不快を表現する回答を2点、“悲しい”“さみしい”などの感情語を用いた回答を3点と得点化した。

③否定的感情喚起を想定した場面で取り得る感情制御については沈黙・回答なしを0点、場面と無関係な言及等の回答を1点、“誰かが代わりに一してくれる”などの願望的回答、回避回答を2点、“返してって言う”“あやまる”等、場面への自律的感情制御に言及する回答を3点とした。

#### 保育者による被調査児に関する問題行動調査

調査を行った被調査児が所属する3クラスの担当保育士を対象に、年少児（3-4歳クラス）の被調査児についてはChild Behavior Checklist/2-3（子どもの行動調査票《2-3才用》：以下CBCL/2-3）99項目、年中児（4-5歳クラス）・年長児（5-6歳クラス）についてはTeacher Report Form（子どもの行動チェックリスト《教師用》：以下TRF）における問題行動尺度（Problem Scales）113項目を横断的調査として実施した。

年少児に使用したCBCL/2-3は本来親用の質問紙であるが、本調査実施時に日本で標準化されていたケア提供者や教師による評価様式であるTRFは5歳以上が対象であったため、年少児（3-4歳クラス）についてはCBCL/2-3を使用した。

CBCLは、Achenbachら（1991）によって開発された、子どもの情緒と行動の問題を包括的に評価する保護者記入のチェックリストであり、その尺度構成は国や文化の違いを越えて一貫性があるとされる。本調査実施時では幼児を対

象に含むチェックリストについては、CBCL4-18日本版（井濶ら, 2001）、子どもの行動調査票《2-3才用》（日本版CBCL/2-3）（中田ら, 1999）、子どもの行動チェックリスト（教師用）（5-18歳）（TRF/4-18 日本語版：児童思春期精神保健研究会標準化）が日本での標準化版であった。

日本版CBCL/2-3は、依存分離尺度、不安神経質尺度、引きこもり尺度、反抗尺度、攻撃尺度、注意集中尺度、発達尺度、睡眠・食事尺度の8つの問題尺度とその上位尺度にあたる内向尺度（Internalizing：依存分離尺度+引きこもり尺度+不安神経質尺度）、外向尺度（Externalizing：攻撃尺度+注意集中尺度+反抗尺度）、総得点（内向尺度+外向尺度+発達尺度+睡眠・食事尺度+その他の項目）からなり、2-3歳児の情緒や行動の問題を把握するためにAchenbach（1992）が開発したCBCL/2-3の日本標準化版の質問紙である。本研究では8つの問題尺度と内向尺度、外向尺度を使用した。

TRFはCBCLを開発したAchenbach（1991）による教師記入のチェックリストである。問題行動尺度は、ひきこもり尺度、身体的訴え尺度、不安／抑うつ尺度、社会性の問題尺度、思考の問題尺度、注意の問題尺度、非行的問題尺度、攻撃的行動尺度の8つの症状群尺度とその他の問題（精神医学的な特殊問題項目）から構成される。そして上位尺度として、内向尺度（Internalizing：ひきこもり尺度+身体的訴え尺度+不安／抑うつ尺度）と外向尺度（Externalizing：非行的問題尺度+攻撃的行動尺度）、総得点（内向尺度+外向尺度+社会性の問題尺度+思考の問題尺度+注意の問題尺度）の指標が存在し、各尺度について、井濶ら（2001）が日本での標準化に際して設定したT得点によるカットオフポイントにより、臨床群と非臨床群の弁別が可能であった。本研究では、各問題行動尺度と内向尺度、外向尺度を使用した。

年少児・年中児・年長児クラスの担当保育士に、各被調査児についてCBCL/2-3日本版（年少児：3-4歳児クラス）、TRF日本版（年中児：4-5歳児クラス・年長児：5-6歳児クラス）の調査を行い、被調査児への否定的感情制御に関する個別面接調査との関連を調べた。



## 結果

### 分析に使用したデータについて

本研究の調査を行ったB保育園は調査年度の年中児クラス（4-5歳児クラス）の人数が少なく、個別面接調査は12名の被調査児にとどまった。また年中児クラス担当保育士の先生が被調査児12名について記入したTRFはすべての被調査児の全項目が0点であり、データとして信頼がおけるか不明であった。

そのため、本研究の分析では録画・録音に失敗した被調査児のケースを除いた年少児クラス（3-4歳19名：男児11名・女児8名）と年長児クラス（5-6歳17名：男児7名・女児10名）のデータを用いて、縦断的調査の予備調査としての確認と統計分析を行った。統計分析にはIBM SPSS Statistics23、IBM SPSS Amos23を使用した。

### 否定的感情制御図版への非言語回答、言語回答の内的整合性

6場面の否定的感情制御図版による調査項目の内的整合性を検討するため、統計分析に使用した被調査児の表情選択回答得点、否定的感情の言語化得点、取り得る否定的感情制御回答得点の信頼性係数を算出した。その結果、表情選択回答得点（ $\alpha = .851$ ）、否定的感情の言語化得点（ $\alpha = .811$ ）、取り得る否定的感情制御回答得点（ $\alpha = .885$ ）と十分な信頼性係数が算出され、各設問の内的整合性が確認された。

### 否定的感情制御図版への非言語回答について

表1、2に年少児（3-4歳児）と年長児（5-6歳児）における否定的感情制御図版の表情選択の回答の度数分布を示す。表により、年少児、年長児に共通して「他子どもの否定的言動」、「物の取り合い」場面のようにな否定的感情がより表出されやすい場面が存在することがわかる。保育園では毎日のように起こる対人葛藤場面であり、年少児でも十分に場面を理解しており、否定的感情を選ぶことができたと考えられる。

表全体を比較すると、年少児から年長児への移行では喜の表情選択が減り、悲の表情選択がやや増加するようであった。個別面接調査コーディングに基づき、沈黙・回答なしを0点、喜・ニュートラルの表情選択を1点、悲・怒の表情選択を2点として得点化し、年少児と年長児で $t$ 検定を行ったが全図版にお

表 1：年少児（N=19）の否定的感情制御に関する各図版への表情選択回答の度数分布

	沈黙・ 回答なし	喜	ニュート ラル	怒	悲
新奇場面（初めて鉄棒に挑戦する）	5	5	3	3	3
失敗場面（走り回って花瓶を割ってしまい、先生に叱責される）	4	4	0	4	7
養育者との分離場面（母が家から出ていくのを見送る）	4	8	1	2	4
他子どもの否定的言動（「一緒に遊ばない」と言われる）	1	2	2	0	14
物の取り合い場面（遊んでいた玩具を他児が持っていくこうとする）	1	3	0	5	10
怖い犬との出会い場面（一人で道で吠えている犬に遭ってしまう）	3	4	2	7	3

表 2：年長児（N=17）の否定的感情制御に関する各図版への表情選択回答の度数分布

	沈黙・ 回答なし	喜	ニュート ラル	怒	悲
新奇場面（初めて鉄棒に挑戦する）	4	1	4	4	4
失敗場面（走り回って花瓶を割ってしまい、先生に叱責される）	2	3	0	0	12
養育者との分離場面（母が家から出ていくのを見送る）	2	6	4	0	5
他子どもの否定的言動（「一緒に遊ばない」と言われる）	1	1	1	1	13
物の取り合い場面（遊んでいた玩具を他児が持っていくこうとする）	2	0	0	6	9
怖い犬との出会い場面（一人で道で吠えている犬に遭ってしまう）	2	2	2	4	7

いて有意な差は存在しなかった。

#### 否定的感情に関する言語回答について

個別面接調査回答コーディングに基づき、各図版の主人公に生じている感情に関する回答を沈黙・回答なしを0点、感情に関連のない言語回答を1点、“いやな気持ち”など不快を表現する回答を2点、“悲しい”“さみしい”などの感情語を用いた回答を3点と得点化し、年少児（3-4歳児）と年長児（5-6歳児）で各図版ごとに $t$ 検定を行った。

その結果、「他子どもの否定的言動」場面、「怖い犬との出会い」場面において年長児の方が有意に感情の言語化得点が高かった（ $t(34)=2.85$ ,  $p<.01$ ； $t(34)=2.34$ ,  $p<.05$ ）（表3）。

表 3：否定的感情制御に関する個別面接調査得点

図版	設問	クラス	度数	平均値	標準偏差 (SD)	t 検定結果
新奇場面	表情選択	年少児	19	1.05	0.78	ns
		年長児	17	1.24	0.83	
	感情の言語化	年少児	19	0.74	0.93	ns
		年長児	17	0.59	0.82	
	感情制御	年少児	19	0.68	0.80	t = 4.61, p < .001***
		年長児	17	2.06	0.97	
失敗場面	表情選択	年長児	19	1.37	0.83	ns
		年少児	17	1.59	0.71	
	感情の言語化	年長児	19	0.74	0.93	ns
		年少児	17	1.35	1.22	
	感情制御	年少児	19	1.21	1.13	t = 3.19, p < .01**
		年長児	17	2.35	1.00	
養育者との 分離場面	表情選択	年少児	19	1.11	0.74	ns
		年長児	17	1.18	0.64	
	感情の言語化	年少児	19	1.00	1.11	ns
		年長児	17	1.53	1.33	
	感情制御	年少児	19	0.84	1.02	ns
		年長児	17	1.47	1.46	
他子どもの 否定的言動場面	表情選択	年少児	19	1.68	0.58	ns
		年長児	17	1.76	0.56	
	感情の言語化	年少児	19	1.21	0.92	t = 2.85, p < .01**
		年長児	17	2.12	0.99	
	感情制御	年少児	19	1.21	1.08	t = 2.31, p < .05*
		年長児	17	2.12	1.27	
物の取り合い場面	表情選択	年少児	19	1.21	1.08	ns
		年長児	17	1.76	0.66	
	感情の言語化	年少児	19	1.11	0.99	ns
		年長児	17	1.35	1.12	
	感情制御	年少児	19	1.32	1.16	t = 3.02, p < .01**
		年長児	17	2.41	1.00	
怖い犬に 出会う場面	表情選択	年少児	19	1.37	0.76	ns
		年長児	17	1.53	0.72	
	感情の言語化	年少児	19	1.05	1.03	t = 2.34, p < .05*
		年長児	17	1.94	1.25	
	感情制御	年少児	19	1.00	1.00	ns
		年長児	17	1.47	1.07	

注) \*p < .05 \*\*p < .01 \*\*\*p < .001

### 否定的感情制御回答について

個別面接調査回答コーディングに基づき、沈黙・回答なしを0点、場面と無関係な言及等の回答を1点、「誰かが代わりに一してくれる」などの願望的回答、回避回答を2点、「返してって言う」「あやまる」等、場面への自律的感情制御に言及する回答を3点と得点化し、年少児（3-4歳児）と年長児（5-6歳児）で各図版ごとに $t$ 検定を行った。

その結果、新奇場面、失敗場面、「他子どもの否定的言動」場面、「物の取り合い」場面において年長児の方が感情制御得点が高かった（ $t(34) = 4.62, p < .001$ ； $t(34) = 3.19, p < .01$ ； $t(34) = 2.31, p < .05$ ； $t(34) = 3.02, p < .01$ ）（表3）。

### 否定的感情制御生成への否定的感情に関する非言語回答・言語回答の寄与

否定的感情の覚知（awareness）が否定的感情制御回答の生成に寄与しているか検討するため、統計分析に用いた被調査児のデータ全体について各図版で重回帰分析を行った。統計分析にはIBM SPSS Amos23を使用した。非言語回答と言語回答の共分散を想定し、非言語回答と言語回答間に共分散を仮定した重回帰モデルで検討を行った。検討は各図版において、被調査児全体、年少児（3-4歳児）のみ、年長児（5-6歳児）のみの3パターンで行った。結果を図版ごとにまとめたパス図を図3に示す。

重回帰分析の結果、「他子どもの否定的言動」場面、「物の取り合い」場面、「怖い犬との出会い」場面の3場面において、特に3-4歳時（年少児）における言語回答が幼児期の感情制御回答生成に有意に影響していた。特に「物の取り合い」場面での言語回答が感情制御回答生成に及ぼす影響は強く、年少・年長・被調査児全体のすべてで強い影響を及ぼしていた。

一方、失敗場面のみで否定的感情の非言語回答覚知が感情制御回答生成に影響した。また失敗場面における非言語回答と言語回答の共分散は、年少児と被調査児全体での分析において有意であった。

### 保育者による被調査児に関する問題行動調査と否定的感情制御個別面接調査による得点との相関

年少児（3-4歳児）については、担当クラス保育士が記入した各被調査児についてのCBCL/2-3各尺度得点を算出し、年長児（5-6歳児）については同じ

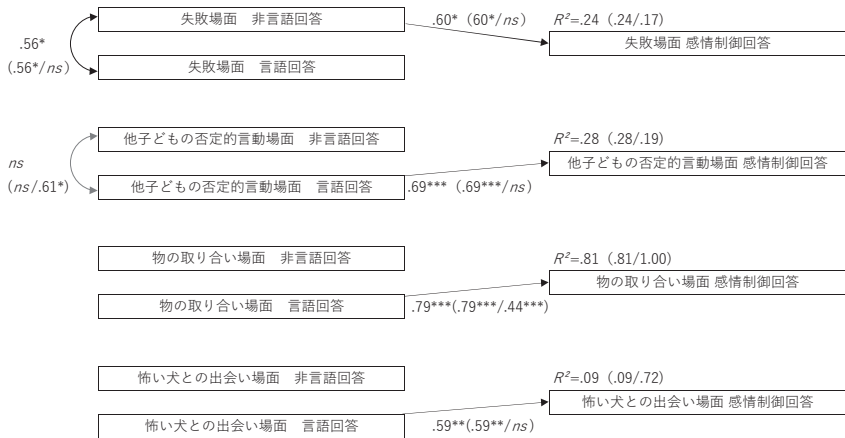


図3：被調査児全体（年少児／年長児）における各図版における重回帰モデル結果まとめ  
注）全体・年少児・年長児の重回帰分析すべてで有意ではないパスは省略した。

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

く各被調査児についての TRF 各問題行動尺度得点を算出し、日本での標準版作成時に定められた男女別の T 得点にそれぞれ変換した。

CBCL/2-3 と TRF の各尺度の T 得点と、否定的感情制御個別面接調査における非言語回答と言語回答、否定的感情制御の各得点について年少児・年長児ごとにピアソンの相関係数を出したところ、年少児のみで有意な相関係数が得られた。

年少児の分析において、新奇場面の言語回答と CBCL/2-3 不安神経質尺度（項目例：33「感情が傷つきやすい」）間（ $r = .48, p < .05$ ）で正の有意な相関が見られた。

また、新奇場面での感情制御回答得点と CBCL/2-3 睡眠・食事尺度（項目例：22「一人では寝たがらない」）間（ $r = .48, p < .05$ ）で正の有意な相関が見られた。

一方、「物の取り合い」場面での言語回答と、CBCL/2-3 引きこもり尺度（項目例：4「ほかの人と目を合わせようとしない」）（ $r = -.53, p < .05$ ）、CBCL/2-3 発達尺度（項目例：2「年齢に比べて行動が幼すぎる」）（ $r = -.46, p < .05$ ）、CBCL/2-3 攻撃尺度（項目例：17「自分のもちものを破壊する」）（ $r = -.49,$

$p < .05$ ), CBCL/2-3 注意集中尺度 (項目例: 8「待ってられない; なんでもすぐにほしがる」) ( $r = -.57, p < .05$ ) の尺度間では負の有意な相関が見られた。

## 考察

本研究の主な目的は、当時計画されていた縦断的調査の対象年齢の幼児について①調査使用図版と調査における質問の内容が理解可能であるかを確認すること、②否定的感情に関する質問への非言語回答と言語回答の否定的感情制御生成とどのように関連するか検討すること、③否定的感情に関する幼児の回答と保育士による問題行動調査 (CBCL/2-3, TRF) の関連を検討することであった。

### 3-6 歳の幼児に否定的感情に関する図版と質問の内容は理解されたか

まず①調査使用図版と調査における質問の内容が理解可能であるかの確認であるが、特に年少児 (3-4 歳児) を含めたすべての被調査児について、調査に使用した図版内容の理解と回答は可能であった。図版内容によって回答傾向に差異が見られた点が、図版と質問内容を理解して回答を行っているからこそと考えられた。例えば、養育者との分離場面は保育園に半年以上通園している子どもたちが毎日繰り返している儀式と経験であり、この場面においては否定的感情を扱えないというよりも、笑顔を選び、毎日の分離場面を語る回答も多かった。一方で、子ども同士での否定的言動や物の取り合いといった場面は子どもたちにとって、毎日現在進行形で起こる課題であるために、回答は自分の経験と否定的感情をまじえながら表出される傾向にあった。年少児は場面について言語化できない場合でも、うなづきや指さしで場面についての質問に関与していた。

こうした回答傾向から見ても、対象年齢の幼児の調査使用図版と質問内容の理解に問題はないと考えられた。また各回答の信頼性係数も高く、各図版に関する質問の内的整合性も問題がないと考えられた。

### 否定的感情制御への非言語回答と言語回答の関連の違い

②否定的感情に関する質問への非言語回答と言語回答と否定的感情制御生成との関連であるが、「他子どもの否定的言動」場面、「物の取り合い」場面、「怖

い犬との出会い」場面の3場面の結果からは概ね3-4歳時（年少児クラス時）の否定的感情に関する言語回答と否定的感情制御生成との関連が高いことが示唆された。どちらも言語による設問であるため、被調査児の言語能力に回答が影響され、関連が高くなりやすい傾向があると考えられる。一方、非言語で感情の覚知を示すことが感情制御に有意な影響を持たない傾向が確認された。非言語回答はそもそも言語能力が未熟な子どもでも指さしで参加できるため、「調査に参加できている」という意識を支えるために導入していた設問であるが、これまで否定的感情制御とどのような関連にあるか明確ではなかった。

例外として、失敗場面では否定的感情に関する非言語回答が、言語回答と有意な共分散を持ち、否定的感情制御に影響した。この結果の違いはおそらく場面の差異にあると思われる。失敗場面は皿を割るという過失であるため、取り得る対処が「謝る」「過失を補償する」以外に出にくい。このため、言語回答による差異がつきにくく、非言語回答による感情の覚知性が影響したと考えられた。

一方で、言語回答は対子ども場面、対動物場面という、より高度な感情制御を要する場面に影響を及ぼしていた。鹿島（2000）は、3歳から6歳の各年齢での不安感情の対処回答について、対人関係に関する図版への回答のみで各年齢間で有意な得点の差があったことを報告している。対人関係に関する感情制御は年齢が上がるにつれてより自律的に精緻化する傾向が見られる。こうした場面への感情制御は、やはり否定的感情を言語で回答できることが否定的感情制御生成に寄与していた。

「物の取り合い」場面は、唯一年長児（5-6歳児）の言語回答が場面の感情制御生成に影響を及ぼした場面であるが、自分が遊んでいたものを横から取られそうになり、自己主張し、相手と交渉しなければならない場面とは他の場面と比べて最も高度な感情制御が必要な場面であるかもしれない。そのため、年長児でも感情の言語回答の巧緻が感情制御生成に影響する図版になったと考えられる。

本研究の結果より、否定的感情制御と3-4歳時の言語回答に関連があることが示された。これは鹿島（2020）の知見とも合致していた。本研究の結果から、

年長児の方が年少児よりも言語回答を有意に多く、感情語を用いて行っているのであるが、否定的感情制御の生成に寄与するのは3-4歳時のより早期における言語での感情共有であった。

#### 保育士による問題行動調査と幼児の否定的感情制御・言語回答との相関

幼児期における臨床的問題の発現と否定的感情制御、否定的感情に関する非言語・言語回答との関連を相関係数により横断的に検討した。その結果、年少児（3-4歳児）での「ものの取り合い」場面への言語回答と、CBCL/2-3の引きこもり尺度、発達尺度、攻撃尺度、注意集中尺度に中程度の有意な負の相関が存在した。

つまり「ものの取り合い」場面で生じるだろう否定的感情を言語で回答できない傾向の年少児（3-4歳児）は引きこもり尺度、発達尺度、攻撃尺度、注意集中尺度が高い傾向にあった。3-4歳時において、感情の言語化の未熟と臨床的問題の発現に関連が見られたこととなる。

近年不安／抑うつ（Anxious／Depressed）、攻撃的問題（Aggressive Behavior）、注意の問題（Attention Problems）に問題を持つ就学前の子どもたちのCBCL尺度プロフィール（AAA scales）を“the Dysregulation Profile（DP）”と呼び、就学前のシビアな発達上の問題を顕す指標として概念化する研究も存在する（Geeraerts et al, 2015）。今回、年少児の感情の言語化と負の相関を示した臨床的問題はDPと重なっていた。今回の結果は、広範な自己制御の困難を表す臨床的問題が、同世代の子どもとの対人的葛藤に起因する否定的感情の言語化の困難と関連することが示されたと言えるだろう。

その他の問題行動調査をめぐる問題として、今年年中児（4-5歳児）のデータではすべて0点の評定があり、保育士による評定の取り扱いについては困難も生じた。子どもの行動や情緒に関する調査では養育者や教員といった、複数のインフォーマントからデータを得ることが重要視されているが、その一致率は概して低いことが報告されている（e.g. Berg-Nielsen et al, 2012）。船曳・村井（2017）は保護者と教師の評価の差について「保護者は少数の子どもを縦断的にみるが、教師は多数の子どもを横断的にみている」という視点の差異のためと述べる。加えて、保育士・教員対象の子どもへの行動・情緒に関する調査に



については、横断的に子どもを評定すること自体への抵抗や様々な背景から消極的参与にとどめたいというバイアスがあると推測される。実際、この後の7年間の縦断的調査においても、保育士によるクラス全員の子どもに関する評定がすべて0点というデータが出現することがあり、保育士評定による縦断データを鹿島（2020）は分析に使用することができなかった。

この問題への対処については、より一層研究の目的の説明に時間をかけ、インフォーマントとなる先生方全員との関係を築き、評定の判断例を示す等も考えられる。しかしそれが研究者による誘導となる懸念もあり、データを得る上で適切な処遇であるかも検討せねばならないだろう。今後の研究の課題としたい。

## 引用文献

- 安部計彦・今村佳子・楠凡之（2002）. 保育園での“キレる子ども”の実態とその原因に関する一考察—質問紙調査を手がかりに— 北九州市立大学文学部紀要, 9, 1-20.
- Achenbach, T. M. (1991). Manual for the child behavior checklist/4-18 and 1991 Profile. Burlington, VT: Department of Psychiatry, University of Vermont.
- Achenbach, T. M. (1992). Manual for the child behavior checklist/2-3 and 1992 profile. Burlington, VT: Department of Psychiatry, University of Vermont.
- Aldao, A., Nolen-Hoeksema, S., & Schweizer, S. (2010). Emotion-regulation strategies across psychopathology: A meta-analytic review. *Clinical psychology review*, 30, 217-237.
- Beeghly, M., & Cicchetti, D. (1994). Child maltreatment, attachment, and the self system: Emergence of an internal state lexicon in toddlers at high social risk. *Development and Psychopathology*, 6, 5-30.
- Berg-Nielsen, T. S., Solheim, E., Belsky, J., & Wichstrom, L. (2012). Preschoolers' psychosocial problems: In the eyes of the beholder? Adding teacher characteristics as determinants of discrepant parent-teacher reports. *Child Psychiatry & Human Development*, 43, 393-413.
- Dodge, K. A., Greenberg, M. T., Malone, P. S., & Conduct problems prevention research group. (2008). Testing an idealized dynamic cascade model of the development of serious violence in adolescence. *Child Development*, 79, 1907-1927.
- Durbin, C. E. (2010). Validity of young children's self-reports of their emotion in response to structured laboratory tasks. *Emotion*, 10, 519-535.
- Eisenberg, N., Spinrad, T. L., & Eggum, N. D. (2010). Emotion-related self-regulation and its relation to children's maladjustment. *Annual review of clinical psychology*, 6, 495-

- 525.
- 船曳康子・村井俊哉 (2017). ASEBA 行動チェックリスト (TRF: 教師用) 標準値作成の試み. *児童青年精神医学とその近接領域*, 58(1), 185-196.
- Geeraerts, S. B., Deutz, M. H. F., Deković, M., Bunte, T., Schoemaker, K., Espy, K. A., ... & Matthys, W. (2015). The child behavior checklist dysregulation profile in preschool children: a broad dysregulation syndrome. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 54(7), 595-602.
- Glasberg, R. & Aboud, F. E. (1982). Keeping one's distance from sadness: Children's self-reports of emotional experience. *Developmental Psychology*, 18, 287-293.
- Halligan, S. L., Cooper, P. J., Fearon, P., Wheeler, S. L., Crosby, M., & Murray, L. (2013). The longitudinal development of emotion regulation capacities in children at risk for externalizing disorders. *Development and psychopathology*, 25(2), 391-406.
- 井澗知美・上林靖子・中林洋二郎・北道子・藤井浩子・倉本英彦・根岸敬矩・手塚光喜・岡田愛香・名取宏美 (2001). Child Behavior Checklist/4-18 日本語版の開発 小児の精神と神経, 41, 243-252.
- 金丸智美・無藤隆 (2004). 母子相互作用場面における2歳児の感情調整プロセスの個人差 発達心理学研究, 15, 183-194.
- 鹿島なつめ (2000). 幼児の不安認知と対処能力についての発達の变化. *九州大学心理学研究*, 1, 195-206.
- 鹿島なつめ (2013). 子どもの否定的感情に対する養育者の関わりと採用するしつけ方略との関連: 3年間の縦断的調査より. *西南学院大学人間科学論集*, 9(1), 31-45.
- 鹿島なつめ (2020). 幼児期後期の否定的感情制御と養育者の否定的感情への反応, Child Behavior Checklist (CBCL) による問題行動の縦断的検討. *教育心理学研究*, 68, 266-278.
- 久保ゆかり (2000). 幼児における自己の感情についての理解--幼児は自分自身の感情経験をいかに報告するか. *東洋大学社会学部紀要*, 38, 75-87.
- Mullin, B. C. & Hinshaw, S. P. (2007). Emotion Regulation and Externalizing Disorders in Children and Adolescents. In J. J. Gross (Ed.). *Handbook of emotion regulation*. New York: Guilford Press. pp.523-541.
- 中田洋二郎・上林靖子・福井知美・藤井浩子・北道子・岡田愛香・森岡由起子 (1999). 幼児の行動チェックリスト (CBCL/2-3) の標準化の試み. *小児の精神と神経*, 39, 317-322.
- Pollak, S. D., Cicchetti, D., Hornung, K., & Reed, A. (2000). Recognizing emotion in faces: developmental effects of child abuse and neglect. *Developmental psychology*, 36, 679.
- 文部科学省 (2011). 暴力行為のない学校づくりについて (報告書) 文部科学省 Retrieved from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/079/houkou/1310369.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/079/houkou/1310369.htm) (2016年6月7日)
- 文部科学省 (2013). 平成24年度「児童生徒の問題行題等生徒指導上の諸問題に関する調査」について 文部科学省 Retrieved [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/01/04/1412082-2401](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/01/04/1412082-2401).

pdf (2021年5月14日)

- 文部科学省 (2020). 令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 文部科学省 Retrieved from [https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext\\_jidou02-100002753\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf) (2021年6月30日)
- Rieffe, C., Terwogt, M. M., Petrides, K. V., Cowan, R., Miers, A. C., & Tolland, A. (2007). Psychometric properties of the Emotion Awareness Questionnaire for children. *Personality and Individual Differences*, 43, 95-105.
- 坂上裕子 (1999). 歩行開始期における感情制御：問題解決場面における感情制御行動の発達 発達心理学研究, 10, 99-109.
- Stein, N. L., & Levine, L. J. (1989). The causal organisation of emotional knowledge: A developmental study. *Cognition & Emotion*, 3(4), 343-378.
- Terwogt, M. M. (1990). Disordered children's acknowledgment of multiple emotions. *The Journal of general psychology*, 117(1), 59-69.

本研究は文部科学省科学研究費補助金（研究課題番号：20730465）の助成を受けた。

西南学院大学人間科学部児童教育学科